

# 鈴木よね (一)

荒井 とみよ

辰巳会

初夏の陽光がひときわ明るい六甲山麓の祥竜寺で、辰巳会二十周年記念大会が開催された。昭和十五年五月のことである。

辰巳会は、旧鈴木商店の関係者による懇親会である。明治中期に砂糖商として出発し、大正期に大活躍をしたけれども、昭和初期の恐慌で倒産した、あの鈴木商店なのである。鈴木はその派手なでい発展ぶりに、「鈴木王国」とまで呼ばれ、経済界ばかりでなく、政治的・社会的にも常にゴシップの種になっていた。しかもその主は女であったために、鈴木よねという彼女の名前の上に、しばしば「女王」「女傑」「尼將軍」などの呼称が冠せられ、特に地元神戸では「鈴木のおよねさん」「鈴木のお家はん」を知らぬ者はなかった。鈴木は直系・傍系あわせて六十を越える会社を経営し、その内容も海外貿易をはじめ、生産・流通のあらゆる部門にわたり、いまいう、

「総合商社」の元祖であった。鈴木商店は、三井・三菱とともに世界の市場を争う一大企業であったのだ。石段を上って山門に入ると、楠の若葉が目み溢れ、藤やつつじの豪華な競演が見られる。こぢんまりとしているけれども荘重な風格の感じられる境内に、木の香も新しい香進札が高々と立っているのは、本殿屋根修復の大工事がいよいよ始まることを告げているらしい。

続々と山門を入ってくるのは、ほとんどが老人であった。当然のことである。鈴木商店が消滅してから、すでに半世紀を越えているのだから。昭和三十五年辰巳会は結成された。この命名は、鈴木商店の本家の屋号（大阪の砂糖商「辰巳屋」）に因んでいる。彼らは毎年集い合、ここに二十周年を迎えたのである。この日の参会者は百五十名。会員総数三百八十名だが

そのうち九十歳以上が十四名いる。八十歳以上は百八十四名という。彼らは集うごとに物故者の法要を営む。この日もプログラムの主なものは、その前年逝去した大屋晋三ほか数名の供養であった。

辰巳会会長の鈴木治雄氏はよねの孫であり、西川政一氏は文蔵の金子武蔵氏は直吉の、柳田義一氏は富士松の息子たちである。高畑千代子氏は先年亡くなった高畑誠一の夫人、やはりよねの孫である。彼らは老いて、先代たちに似て来たのでもあろうか、ふと目の前の現実から色彩が剥落していく錯覚に襲われる。すると祥竜寺境内の園遊会風景は、まるで大正時代鈴木商店華やかなりしころのそれなのであった。境内の墓地には、よねをはじめとする先代たちの頌徳碑が建立されていて、不思議な幻覚に陥ることをいつそう促すのである。

一年に一度は顔を見る、そのことに意味があるのだという人もいる。最後の一人まで葬式をしていくのだという人もいる。介添えなしでは歩行も困難な老人たちが、会釈を交わし、歓談している。ゆつくりとしか移動できない彼らは

長い時間をかけて記念撮影する。酒樽が割られ、模擬店が賑わう。床几にたむろし、演歌や民謡を披露する。個人企業の現状を報告している老人もいる。マイクを持っている人に特に注目もしないけれど、無視しているのでもない。ほかのどこでも接したことのない不思議な園遊会なのであった。

これはのどかな実家帰りなのであるらしかつた。今ぜひしておかねばならぬ話は、あまりないらしかつた。老人たちが帰り仕度を始めたのは、散会予定の時間にはまだまだ間のあるころであった。

「お家さま」鈴木よねの胸像は高い台石の上に置かれていて、墓地の中でも群を抜いてそびえている。仰ぐような場所にそれは建てられたようだ。下から見ると、像はいくぶん上向き加減で、まるで地上の賑わいは素知らぬふり、宙を見据えているのであった。

この寺は、昭和二年（一九二七）彼女が二万円の寄進をして再興されたものである。それまで廃寺同様であったが、妙心寺の管長もして名僧としての評判も高かった愚溪和尚が、隠居するに際して再建されたのである。和尚がそれまで

住持した神戸平野の祥福寺に似せてそれは建てられた。

よねは愚溪和尚に深く帰依していたが、昭和二年といえは鈴木商店倒産の年である。寄進の話はいい出しかねていた。けれども、社長としての給金は一銭も払われていなかった、一代の給金を積み立てたものとみれば不当ではないということ、会社は許したのであった。

辰巳会会長の呼びかけで、今回の祥竜寺改修の寄付金は七千万円にも達した。辰巳会の人々は、これもみな「お家さまのご威光」であるという。

それにしてもよねの銅像は、なぜあんなに高い台座の上に置かれているのであろうか。何かしら周囲との均衡を無視した高さであった。

## 先代岩治郎

姫路市米田町は白鷺城の西南に当たる小さな一角である。大通りに林立するビルの間を少し入ると戦火をまぬがれた古い家並みが残っていて、仏壇屋、蠟燭屋、和菓子屋などの時代がかつた看板が見える。ふり仰ぐと目にまず入るの

は天守閣で、ここには時間が流れていないように感じられるが、百年前のことを尋ねても応えてくれる人はいない。

鈴木よねは、この町の仏壇漆塗師、丹波屋西田忠右衛門の三女として生まれた。嘉永五年（一八五二）八月十五日のことである。忠右衛門は丹波からこの城下町に漆を届ける漆取りであったが、米田町の塗師、福田惣平に見込まれて同じ町内に借家住まいの商いを始めた。商売は繁盛し、妻りよとの間には七人の子供も生まれた。

よねは、働き者の父母、兄弟の多い幸福な家庭に長じ、主人筋の福田家の次男に嫁入りした。ところが両家の確執の巻き添えを食い不縁となった。似たような家同士の不和はどこにでもあろうし、それでも耐えていた女は多い時代であったが、よねはその道を選ばなかつたのである。

よねの兄（西田仲右衛門）は青雲の志を抱いて神戸に出ていたが銀相場で成功した。この兄の縁でやはり神戸の若い商人、鈴木岩治郎とよねは再婚することになる。後年、よね自身の口から不幸な最初の結婚について語られることは

一度もなかつた。語られないだけに、小さな町での憂鬱な体験は、よねの胸の奥に懐剣のように深く秘められたというべきかもしれない。

鈴木岩治郎は、もと川越藩の下級士族、武士とは名ばかりの貧しい夫婦の次男に生まれた。生まれるとすぐに養子に出された。幼くして他人の世界に投げ込まれたことが、彼の商才と野望を育てた。

菓子職人として自立したとき、養育をすでに放置した父母と兄が彼を頼って来た。目ぼしいものは全部家族に譲り、岩治郎は再び無一文になって長崎へ旅立った。長崎は新時代の拠点であった。洋菓子の玄関であった。無銭の修業の旅は放浪に似ていたが、小さな菓子屋に納まり切らない自分の器量を確認する旅立ちでもあった。いくらかの金を長崎で蓄えた彼が、なぜ東京に帰らず神戸に停まったかについては、いくつかのエピソードもあるが、事実かどうか確かめる方法はない。ともかく運命としかいいようのない経験をたどって、岩治郎はよねと結ばれたのである。

開港後間もない兵庫の浜に支店

を出した大阪の砂糖商があつた。辰巳屋という。辰巳屋は砂糖ばかりでなく、清国との貿易で発展し明治初期には、関西貿易商の筆頭に数えられるところまでいった。この辰巳屋の神戸支店で大活躍したのが、鈴木岩治郎である。彼は主人の信頼を得、神戸支店を譲り受け、新しいのれんを掲げた。辰（カネタツ）鈴木商店と称する。

岩治郎は場を得た。活気を呈し始めていた神戸居留地を舞台に、カネタツ鈴木商店の若い主人の商いは、いつも積極果敢であった。よねが嫁入りして来たのはこの時期、明治十年（一八七七）よね二十六歳（以下年齢は数え年）のときである。再び生きて実家の敷居は踏むまいという決意があつた。その意味で普通の新妻ではなかつた。当時の女には珍しい大柄で健康な身体が、豪胆な気性を支えもしたが、草創期の鈴木商店で岩治郎を補佐することは、苦勞を自ら引き受けることでもあり、そういうとき一歩も退くまいとすれば、気丈な精神は一層強くなった。

砂糖市場は急激に拡大し、業界は若々しい気迫に充ちていた。鈴木岩治郎はその中であつて、覇を

競う一人であった。また、神戸の財界にあつても彼は頭角を現わしている。貿易会社の副頭取、商業会議所議員、神戸区取引所発起人などの肩書きが加わっていった。舞台は整った。開花はいまからである。

明治二十七年（一八九四）、鈴木岩治郎は突然逝った。急坂を息に登り詰めたような激しい一生であった。よねは四十三歳で寡婦となった。

## 門出

その日の出来事を、辰巳会の人人は熱っぽく語る。立ち会った人はすでにみな故人である。話に尾ひれがつき、脚色があるのは当然のことだが、それらを差し引いて考えても、やはり感動的な出来事であつたのだらう。

岩治郎没後、三十五日の法要の席のことである。親戚、店員一堂に会し、商店の存廃について協議がもたれた。旭日の勢いで発展した鈴木商店であるが、変動の激しい時勢であり、あまつさえ危険の多い外国商館との取り引きである。このころの居留地の紅毛碧眼の商人の中には、あからさまな愚弄の

態度をとるものもあつた。二人の遺児、徳治郎（のち二代目岩治郎襲名）、岩蔵はまだ幼い。後の生活に憂えがないだけの財産はあつた。店は閉めて平穏な生活に入るのがよからうとの意見が大勢を占めた。よねは終始黙して、その腹藏のない意見に耳を傾けていた。

「最後にお家はんのお考えを」という声に促されて、よねは始めて口を開き、「店は続けたい」といい切った。

二十年にも充たない結婚生活であつたが、ここでわたしはほんとうに生きた。気難しい男であつた、理不尽に癩癩を起されたこともあつた。周囲の人々も甘いばかりではなかつた。厳しい仕うちもあつた。死を思つた日さえある。しかしわたしは逃げたくなかつた。商売の修羅場を生きている男の鼓動を聞くのが好きだつたから、夫とともにわたしも闘つていたから。今、鈴木商店ののれんを降ろすことは、夫の野望を葬ることである。夫を二度葬ることはできない。

よねの前で決断を待っている店員は、岩治郎が遺したもつとも大きな財産なのであつた。この財産を生かす道は商売を継ぐことにし

かない。商売は彼らがやってくれらるだろう。前途有為の若者たちから活動の場を奪わないというだけのことではないか。よねの決意には力みがなかつた。言葉少なに、夫の夢を自分の夢として引き継ぐことを、よねは一同に告げた。

よねの実兄、西田伸右衛門とカネタツ藤田商店（鈴木商店の兄弟店）を後見人として、ここに店主・鈴木よねの鈴木商店が生誕した。

昭和十三年、よねの死に際して捧げられた弔辞は、鈴木商店のあらゆる業績を彼女の偉業として称えている。よねは「鈴木商店のすべてを為した」のである。

また、後年刊行されたよねの歌集『波の音』の跋文も、鈴木商店の歴史を、彼女自身の事蹟として簡明に記している。

ところが私の出会つた関係者たちは、一様にいうのであつた、「よねは何一つしていませんよ」と。そして鈴木商店に関するさまざまな資料にも、よねについての記述は数行、しかも事業とは無関係に添えられているだけなのである。

鈴木よねはすべてをなしたのか、何ものもなさなかつたのか、彼女の伝記はこの亀裂の謎を解くこと

でもあるのだらう。

社長よねの鈴木商店は、資本金十万円を出発した。ここに二人の大番頭がいた。柳田富士松と金子直吉であつた。

柳田富士松は明治十八年（一八八五）に入店した。不幸な少年期を大阪で過ごして、遠縁の岩治郎を頼つて神戸に來たのは二十一歳のときである。彼は鈴木商店の砂糖部門を担当した。

金子直吉の生い立ちも、また貧乏物語を地でいっている。土佐で生まれたが、貧乏のあまり学校にも行けず、神主に頼んで手習い算術をしたという。借金する能しくない父と、働き者の母とに育てられ、子供のときから紙くず商いをし、見習いをし、丁稚奉公をせねばならなかつた。神戸に出て岩治郎のもとに身を寄せたのは、富士松に遅れること一年、やはり二十一歳のときである。彼は樟脳部門を担当した。

岩治郎、富士松、直吉の生い立ちの記は、あまりに酷似している。語り手たち聞き手たちの思い入れの中で、三人の伝説は互いに影響し合い、相似た色合いに染められていったのであろうが、そういう

物語を求める體質を鈴木商店そのものが持つていたのである。この三人によねも含めて共通しているのは、しなやかなしたたかさともいえるようなものである。打たれてもまれていよいよ柔らかく強くなる健康な体質である。

世間では攻めの直吉、守りの富士松という。二人のみごとに補完し合う関係は、鈴木商店の歴史の中でも、一度も揺らぐことはなかつた。

## 躍進

金子直吉は台湾民政長官の後藤新平に接近して、彼の絶対的信頼を得たが、これが台湾貿易の出発点になつた。後に鈴木商店の運命を決める台湾銀行との結びつきもここから始まる。政商としての第一歩をここに踏み出したといいかえ

てもいいのである。

意気軒昂の若い直吉は、樟脳相場で大膽な空売りをを行い、これらみごとに失敗してしまつた。商店は生まれたばかりで倒産の淵に立つたのである。

富士松は直吉を責めなかつた。彼は鈴木の内でもあり、兄番頭でもある。けれども彼は直吉こそ

自分にできないことをなす人と、他人にもいい、自らも畏敬して

いた。直吉が「切れ者」であることを逸早く見抜いていたという点で富士松もまた別の意味の「切れ者」であつたのだ。

よねもこのとき、ごとごとといわなかつた。何ごともおまえたちに委せている。好きなようにやればよい。責任は私がとろうと、事ここに及んで少しも慌てるどころがなかつた。

よねの信頼、富士松の協力、直吉は自分のしでかした窮地を脱するために、奮起せざるを得なかつた。懐剣をたずさえて相手商館に単身乗り込み、切腹の覚悟で当たつたという。幸運に事が解決したが、直吉にとっては初めての苦い薬であつた。

この出来事は、店員たちへの無言の進軍ラッパであつた。「お家はんの信頼は、口先だけのものやない、大番頭はんは仕事のやれるお方や」という意味で。明治二十九年（一八九六）のことである。

数年のうちに銀行預金は当初の二倍になり、商店は合名会社鈴木商店として整備された。資本金は五十万円であつた。ロンドン、二

ユーヨーク、ハンブルグに販売店が置かれた。

明治三十六年、九州大里に製糖所を設置、三十八年には、小林製鋼所を買収して神戸製鋼所として出発、重工業部門の発展への礎であつた。四十年には大里製糖所を

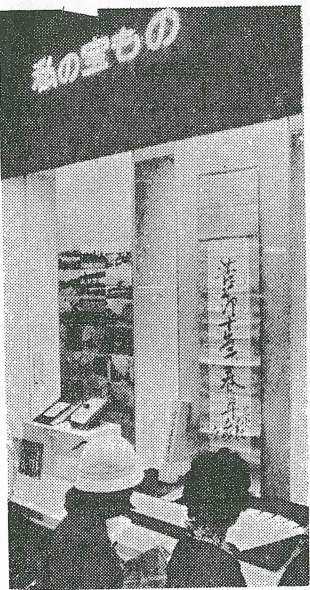
大日本製糖に売却した。二百五十万円で作つたものを四年後に六百五十万円で売つて業界を驚かせると同時に、国内砂糖市場の販売権を取得したのである。四十二年にはボルネオに進出、ゴム栽培をはじめ「南洋」貿易の足がかりとした。

躍進、また躍進であつた。直吉

の賭はすべて当たつた。富士松は直吉の要求どおりに資金繰りをした。商品内容も多角化した。船舶部門が創設され、海運界に躍り出ようとする目論んでいた。大型船第一号は「米丸」と名づけられたのである。

このころ、西川文蔵をはじめとする学卒者が入店して來た。勤と経験で働いていた鈴木商店に近代の風が吹き込んで、一層活気づいた。鈴木商店は明治の末には砂糖市場を制覇したけれども、もはや砂糖商の鈴木ではなくなつていた。彼らはこのような高揚の中で第一次世界大戦を迎えたのである。

## 兵庫 兵庫 館 鈴木商店の遺品に人気



兵庫 兵庫 館 鈴木商店の遺品に人気

兵庫 兵庫 館 鈴木商店の遺品に人気

私の宝ものコーナーに展示された鈴木商店ゆかりの遺品（写真）